

清少納言と郭公詠

——郭公詠の伝統と創造の間の苦闘——

十日 新瀬 雅 義

はじめに

長徳四年（九九八）五月五日の朝、清少納言は中宮定子に車を用意して貰い、女房三人を従えて、郭公（ウラキミ）の声を尋ねに賀茂の奥へと出掛けていった。「枕草子」第九五段「五月の御精進のほど」に見える話である。

この外出は、五月一日から雨がちな曇りの日が続いて「つれづれの余り、清少納言自らの「郭公の声尋ねに行かばや」との提案が発端で、中宮職よりわざわざ車を一台用意して貰い、同行希望者の多い中わずか四人で探訪の日帰り旅行を許されたものであった。一行は洛北にあった中宮の従兄弟高階明順の館を尋ね、そこで「げにぞかしがましと思ふばかりに鳴きあひたる」郭公の声を聞く。

本来ならばここで郭公の声を聞いたという和歌を詠み、それを「公務出張」の「報告書」として帰参の後に披露することになるのだが、

清少納言ら一行は他事に興じてとうとう歌が詠めずじまいで帰ってきてしまった。帰参後、歌を詠んで帰らなかった清少納言たちを定子は珍しく強い調子で叱り、今こゝでも詠むように言うが、また急に他の用事に追われ、結局詠めないまま取り紛れてしまう。

この後、清少納言は晴の席での詠歌免除を願ひ出て許されるのだが、時として笑いを誘われるようなことが和やかに語られるこの章段に、私は「なぜ、清少納言は当然詠むべきだった郭公の歌を、とうとう詠めずじまいで終わってしまったのか」という疑問を持つことを禁じ得ない。

清少納言は歌の才が劣っていた、と言ってしまうはそれまでだが、「枕草子」で清少納言の古典をふまえた和歌のやりとりが随所に見出せることから勘案して、私は、この章段で清少納言が郭公詠を詠めなかつたのは、もっと他に理由があったのではないかと考えている。以下、第九五段「五月の御精進のほど」章段を中心に、定子の文言「あまり儀式定めつらむこそ、あやしけれ。ここにても詠め」と、清少納言が「元輔が後と言はるる君」と見られていたことを手掛かりにして、伝統と創造の間で苦闘していた清少納言の姿を読み取ってみたい。

一 注目されていた清少納言の詠歌

清少納言が郭公の歌を詠むことを自分の任と考え、気に掛けて何度も詠もうと試みていたことは、田舎の見せ物に興じていたので「郭

公の歌詠まむとしつる、まぎれぬべし」と記し、五月雨に追われるように田舎の明順の館を出て帰途に付く時、「さて、この歌はここにこそ詠まめ」と提案し、土御門の前で藤侍従公信から「歌はいかが。それ聞かむ」と所望された時には、「今、御前に御覽せさせ後こそ」と答えていることなどから確認できる。

また楠参後「さていづら、歌は」とお聞きになった中宮定子に、「かうかう」と歌を詠まなかつたわけを申し上げたところ、「口惜しのことや。上人などの聞かむに、いかでかつゆをかしきことなくてはあらむ。その聞きつらむ所にて、きとこそは詠まましか。あまり儀式定めつらむこそ、あやしけれ。ここにも詠め。いと言ふ甲斐なし」と叱られ、清少納言は「げにと思ふに、いとわびしきを、言ひ合わせなど」していることから、猶も郭公の歌を詠もうとしていた姿勢を読み取るができる。

しかしながら藤侍従公信からの和歌が送られてきて、その返歌を先に考えたり、急な雷の音に替えながら御格子をしめたり、また雷の見舞いに中宮を来訪する人々の応対をしたりなど、歌を考案中諸事に追われたために、結局郭公の歌を詠むことは紛れてしまった。そればかりか公信への返歌も詠めなかつた清少納言は「今日は歌はだめだ」と一旦は気落ちするが、こゝまでくると逆に開き直り、猶も歌を求め「詠む気がしないのでしょう」と不満気な定子に対して、「されど今は、すさまじうなりにてはべるなり」と意見し、「そんなことがあるうか」と言う定子の言を無視して、とうとう沙汰やみ

になってしまったのである。

定子が「さて、いづら、歌は」とお聞きになり、「上人などの聞かむに、いかでかつゆをかしきことなくてはあらむ」と叱ったことは、「郭公の声聞きて、今なむ帰る」と聞いた公信が「歌はいかが。それ聞かむ」と言っていることと対応している。即ち郭公の声を聞きに出掛けていった清少納言が、いったいどんな歌を土産に詠んできたかということは、皆の大きな関心事であり、それ故に「報告書」の次元を越えて定子が執拗に求めたものだったのであろう。

二 清少納言と郭公

清少納言の郭公に寄せる思いは強い。第三八段「鳥は」章段で異國のものとして鸚鵡を挙げた後に、郭公、水鶏、鴨、都鳥と和歌によく詠まれる鳥を列挙している。そして「郭公はなほさらに言ふべきかたなし」と言い、「歌を踏まえたような書きぶり」（石田稜二氏）を書き連ねて礼賛し、人より先に聞こうとして寝ずに起きていて、明け方に聞いた鳴き声を「らうらうじう愛敬づきたる」と感じ、「いみじう心あくがれ、せむかたなし」と評する。

清少納言にとって郭公は、「忍びたる」声で「遠く空耳かと思ゆばかりたどたどしく」鳴くのを聞いて「何心地かせむ」と感じるのは勿論のこと（第二段）、夕暮時に郭公が「名乗りしてわたる」のも「すべていみじき」と感じている（第三六段）。また五月の節会

の帝の御輿の先で舞人が舞う情景での最高の取り合わせとして、郭

公が鳴いたら「似るものなかりけむかし」と想像する。そして賀茂祭の婦さを見物しに早朝出掛けたとき、日は昇ったものの曇り空のもと、郭公が「あまたさへあるにやと鳴きひびかす」のも「いみじうめでたし」と感じている（第二〇八段）から、夕方から夜にかけて忍び音で鳴こうと、日が昇ってからたくさん鳴く声を聞こうと、お構いなしにとにかくすばらしいと評価していることになる。そればかりか郭公を悪く歌う田植え歌をきいて「心憂き」と感じ、「郭公爲に劣る言ふ人こそ、いとつらう憎くれ」とまで言いきる（第二一二段）。橘の花も桜の美しさに劣らないばかりか、郭公の宿と古歌に詠まれているせいか「さらに言ふべうもあらず」という具合に、取り合わせに郭公を出してくるのである（第三四段）。

郭公は和歌の世界でよく詠まれる素材であると同時に、清少納言自身、思い入れの強いものであった。第九五段では、その郭公の声を尋ねに出掛けたのである。

三 三代集の郭公詠

郭公を詠んだ歌は、古来より大変多く、その数に比例して詠まれた方も多種多様である。時代は下るが、平安末期に藤原清輔は「袋草紙」の中で能因の言として「郭公秀歌五首也。而相加能因歌、六首云々」を伝え、能因の歌「郭公来鳴かぬ宵のしるからば寝る夜も一夜あらましものを」（『後拾遺和歌集』二〇一）を記した後、五首を次の様に勘案している。

①夏の夜の臥すかとすれば郭公鳴く一声に明くる東雲

（紀貫之「古今和歌集」一五六）

②行きやらで山路暮らしつ郭公今一声の間かまほしさに

（源公忠「拾遺和歌集」一〇六）

③深山出て夜半にや来つる郭公眺かけて声の聞ゆる

（平兼盛「拾遺和歌集」一〇一）

④五月園倉橋山の郭公おほつかなくも鳴きわたるかな

（藤原実方「拾遺和歌集」一二四）

⑤都人寝て待つらめや郭公今ぞ山辺を鳴きて出つなる

（道綱母「拾遺和歌集」一〇二）

夜から明け方にかけて鳴く郭公のほのかな一声を聞いたとする趣向の他、郭公の声聞きたさに自ら山里で暮らす趣向のもの、夜に山でかすかに聞いたとする趣向の歌である。

勅撰集における郭公詠は、夏部を中心に多い。当然私家集にも多く詠まれ、詠み方も多岐にわたる。寝ずに待ち続けることを詠んだものが多いが、それは声を聞いたことに価値があることとなり、自分だけ初音が聞けたという「山がごとく人は言へども郭公待つ初声は我のみぞ聞く」（坂上是則「拾遺和歌集」一〇三）や、他人が聞いたことを憧憬し自分も聞きたいという「春は惜し郭公はた聞かまほし思ひ煩ふしつ心かな」（清原元輔「拾遺和歌集」一〇六六・三元輔集「九五」という詠み方もなされている。

また郭公の鳴く声に自分の「泣く」声と合わせて「五月山梢を高

み郭公なく音空なる恋もするかな」（紀貫之『古今和歌集』五七九）と詠まれたり、郭公を浮気な相手に喩えて「里（こゝろ）に鳴きこそ渡れ郭公すみか定めぬ君たづぬとて」（敦慶親王『後撰和歌集』五四八）など、恋の歌としても詠まれるなど、郭公を素材として様々な趣向で歌が詠まれていたのである。

四 郭公詠の趣向と清少納言の状況

清少納言は郭公を大変好んだにもかかわらず、『枕草子』にも『清少納言集』にも郭公詠は見当たらない。だから清少納言の郭公詠の趣向を類型化することは不可能である。そこで、この第九五段における状況を本文に即して分析してみたい。

時間的には夜でも暁方でもない五月雨がちな昼間である。また、「かしがましと思ふばかりに鳴きあひたる」郭公の声だったから、忍び音を聞いたわけでも、待ち続けてやっと聞いたわけでもない。女房四人で出掛けて聞いたのであるから、自分一人だけ聞いたわけでもない。従って『袋草紙』の郭公秀歌五首の趣向は、何れも合わないことになる。

更に定子が職御曹司におられた長徳四年というこの時期、中関白家のかつての栄華は過去のものとなっているから、往時を回想するという「石上古き都の郭公声ばかりこそ昔なりけれ」（素性法師『古今和歌集』一四四）のように詠むわけにもいかない。当日の状況として五月雨がちな空模様が記されているが、五月雨と合わせた歌、こ

の頃は五月雨近み郭公思ひ乱れてなかね日ぞなき」（詠人不知『後撰和歌集』一六三）のように、共に「なく」（鳴く・泣く）わけにもいかない。都では中宮定子をはじめ同僚女房たちが、郭公の声を聞きたがっていたのだから、掲揚した坂上是則の歌（『拾遺和歌集』一〇三）や、「あし引の山郭公うちはへて誰かまさると音をのみぞ鳴く」（詠人不知『後撰和歌集』一八四）のように神経を逆撫でするような趣向も採るわけにはいかないだろう。

また道長方との繋がりをいろいろ取り沙汰されていた清少納言であるから「郭公初声聞けばあぢまなく主定まらぬ恋せらるはた」（素性法師『古今和歌集』一四三）のように詠むわけにもいかない。

このように当日の諸状況から和歌の構成要素と趣向を考えてみると、伝統的な詠み方で一首仕立てようとしても、発想の上で様々な制約があり、かなり難しい状況であったと言えよう。

五 清少納言の狙った郭公詠

このような状況下で、清少納言が詠む歌としては、どのようなものが考えられるのだろうか。

郭公詠の伝統に基づいて詠むならば、鄙で目的の郭公の声を聞くことができた嬉しさを基本骨格とし、「口惜しう御前に聞こしめさせず、さばかり慕ひつる人々を」の文言から勘案して、内裏にいる定子たちにもお聞かせしたいというものや、そこから定子に思いをさせて「郭公人待つ山に鳴くなれば我うちつけに恋まさりけり」（紀

貫之「古今和歌集」一六二)のようなのが、採用されうる趣向と
なつてこよう。もっとも定子思慕の歌は、中宮職の「公用車」を仕
立てて貰つての「公務出張」の報告書にはあまりふさわしいもので
はないかも知れない。

この第九五段に見える清少納言の「尋郭公」という行動を、車田
直美氏は「実景・実感を重視しそれに適する場を尋ねるといふ當代
歌人たちの詠歌姿勢の変質と連動」したものと位置付けられ、「郭
公探訪」が「必ずしも定子サロンの独創ではなかった」と指摘され
た。「一を尋ぬ」という題設定を「後拾遺和歌集」の新風の一つと
見られる川村見生氏の説²⁾をふまえられてのお考えで、首肯されるも
のと考へるが、そういう新趣向のものであるならば、清少納言は当
然、時代をリードする歌を詠もつと意図したはずである。自ら好む
郭公を従来の詠まれ方とは異なつた、新しい趣向で詠み、「さすが
は清少納言よ」と評価されたいと意気込んでいたのではないか。

高階明順の館からの帰途、卯の花で車を垣根の様に飾り立てたと
いう行動は、「卯の花の咲ける垣根の月清みいねず聞けとや鳴く郭
公」(詠人不知「後撰和歌集」一四八)をはじめ郭公詠によく取り
合はされる「卯花垣根」という素材を、実際に「モドク」ことでそ
の趣向を実感し、昂揚した気分の中に、大好きな郭公の声が聞けた
という報告内容を一首に仕立てようと考えたのではないだろうか。

しかし卯の花は「郭公我とはなしに卯の花のうき世の中に鳴きわ
たるらん」(凡河内躬恒「古今和歌集」一六四)のように、しばし

ば「憂し」とかけて詠まれるため、なかなか難しい素材でもあった。
しかもこの車の様を人に見せようと思つたところが、「あやしき法
師、下衆の言ふかひなきのみたまさかに見ゆるに口惜しくて」それ
で「この車の有様を人に語らせてこそやまめ」と、わざわざ藤原公
信を呼びにやるのだが、この行動などは、友人の訪問がないことを
恨んで遣わした歌「白砂に匂ふ垣根の卯の花の憂くも来てとふ人の
なきかな」(詠人不知「後撰和歌集」一五四)そのままである。郭
公の住みかとされる卯花垣根にしつらえることで、定子らの望す
る郭公を内裏まで引張つてこようという趣向も考えられようが、
いずれにせよ清少納言ら一行は卯花垣根と郭公を取り合わせる趣向
を「モドク」ことをしても、結局歌が詠めなかつたのである。

六 詠めずじまいの理由

ここで考え合わせたいのが、定子の「あまり儀式定めつらむこそ
あやしけれ」(三卷本)の言である。この本文は、能因本「あまり
儀式ことさめつらむぞあやしきや」、前田家本「あまりきしきしこ
と定めつらむぞあやしき。はや」と諸本間に異同が存在し、解釈が
微妙に分かれる。いくつか参照してみたい。

三卷本の本文による先学の解釈は「儀式定めつ」を「格式ばる」
ととられたものが多い。池田亀鑑氏「あまり格式ぶつたのがいけな
いのですよ」(『全講枕草子』)、田中重太郎氏「趣向をこらさう
として、格式ばり過ぎたのがよくないのだわ」(日本古典全書「枕

草子」)、稲賀敬二先生「あまり格式はったりするとは、いつものお前の流儀にも似ぬ事をしたわね」(鑑賞日本の古典「枕草子」)、あるいは少し意識して石田穰二氏「あんまり勿体ぶり過ぎたのは、感心できませんね」(角川文庫本「枕草子」)、萩谷朴氏「あまり慎重ぶってたらしいのが、けしからぬことよ」(「枕草子解環」)、増田繁夫氏「儀式ばった形の歌にしようとしているのは」(和泉古典叢書「枕草子」)とされている。

また能因本の本文「儀式ことさめつらむ」についても「さめつ」を「興醒め」ととり、北村季吟「あまり儀式めきてよまんとするに よりて哥のおおければ興さめつらんよと也」(「枕草子春曙抄」)、岩崎美隆翁補注本「儀式の字を活かしいへるにて、意は儀式ばりて折角の興もさめつらむと也」(補訂「枕草子集註」)、金子元臣氏「余り儀式だち重々しく考へ過ぎて、歌の出来ずなりて、却りて興の醒めつらんと也」(「枕草子評釈」)、田中重太郎氏「あまり形式張って詠もうとし過ぎて、かえって興をさめたのでしょうよ」(「枕草子全注釈」)とされている。

本文異同について今は深く立ち入らない。しかしいずれにせよ、定子は「出張報告書として詠もうとしたために、肩に力が入り、あれこれ考え過ぎたので詠めなかったのでしょう」と推察していることとなる。この定子の推察は的を射ているのではないか。

七 まとめ―伝統と創造の間での苦闘―

清少納言が聞いた郭公の声は聴覚的美意識である。一方清少納言が得意としたのは、視覚的美意識である。聴覚と視覚を対比させた郭公詠は「郭公峯の雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき」(平篤行「古今和歌集」四四七)がある。

私は視覚的描写に秀でた清少納言が、聴覚でとらえた郭公の声と視覚でとらえた田舎の新鮮な景物とを、どう関わらせて詠もつかとあれこれ考えていたのではないかと考える。清少納言は「枕草子」で動植物を描く時「いとをかしげなる猫の、赤き頸綱に白き札つきて」(第八五段「なまめかしきもの」)のように色彩の対比という視覚面でとらえて描くことが多い。更に初段に「春は曙」と記している様に、人が気づかなかったものに美を見出す傾向も指摘される。勿論第六四段「草の花は」のように、「観察も特に独創的というほどのものはあるまい」(石田穰二氏・角川文庫本の評)というものもあるが、手放して好きな素材である郭公の声を聞きに出掛け「報告書」として郭公詠を披露する場を与えられた清少納言は、実際に経験してきた田舎の景物とそれに対する新鮮な感覚を生かして、伝統にとらわれない新しい趣向の郭公詠を創造しようと悪戦苦闘していたのではないだろうか。

父清原元輔はその家集を見ると、歌合での出詠をはじめ屏風歌や祝賀歌など晴の歌が多く、一条朝においては近き世の代表歌人であ

った。その元輔が「梨壺の五人」として編纂に携わった「後撰和歌集」に、郭公は様々な趣向で詠まれている。清少納言が「後撰和歌集」の和歌をふまえた卯花垣根の趣向を實踐し、それを吹聴しながら、郭公詠を詠めないということは、「元輔の娘」としての立場を余計に危うくさせるものであった。さらに「めでたきことなど人の言ひ伝へぬは甲斐なきわざぞかし。また見苦しきこと散るがわびしけれ」（第一三一段）と行成に言い放つ清少納言は、出張報告書と注目されていた郭公詠として、自信作しか披露したくなかったはずである。

清少納言はなんとか詠まずにすませたいと思って「紛れぬ」と言っているのではない。考えている間に他の用事が入ってきたということであって、「紛らわした」のではない。清少納言は必死になつて「報告書」たる郭公詠を創ろうと悪戦苦闘していたのではないだろうか。それが「歌人清原元輔」の娘として注目されていた清少納言の、自らの提案から端を発した「公務出張」の「報告書」たる郭公詠に対する姿勢であり、結果として詠めなかったことから、そういった公式の場での詠歌免除願を申し出る行動に展開していくのではないか。

この第九五段「五月の御精進のほど」から、新鮮な感覚で、伝統的なものにとらわれまいとする清少納言の、創造への苦闘を読みとることができるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 小論では「ほととぎす」の表記を「郭公」で統一した。
- (2) 「枕草子」本文及び章段は、三卷本系を底本とされた石田穰二氏訳注「新版 枕草子」（角川文庫）による。
- (3) 稻賀敬二先生「鑑賞日本の古典5 枕草子」（尚学図書）の解説による。
- (4) 田中重太郎氏校註「枕草子」（日本古典全書 朝日新聞社）の頭注による。北村季吟「枕草子春曙抄」にも「かやうく」の首尾にて哥はよみ侍らずと申あぐる也」との注がある。
- (5) 以下勅撰集と私家集はすべて「新編国歌大観」（角川書店）第一巻及び第三巻による。漢字、仮名などは私に一部改めた。
- (6) 平成六年度中古文学会春季大会における御発表（「尋郭公」考―「枕草子」―「五月の御精進のほど」の段をめぐって―）のレジメ要旨による。
- (7) 「撰定期和歌史の研究」（三弥井書店 平成三年）による。

—安田女子大学専任講師—